文化財保護課

下新田中沖遺跡

民間宅地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序

前橋市は関東平野の北部、赤城山南麓部を市域とする県都であります。利根川・桃ノ木川・詩情豊かな広瀬川の清流が市域を潤し「水と緑と詩の町」として豊かな自然の中で発展してきた町です。

前橋中心部市街地から約3㎞余高崎市大沢町・同萩原町と接する位置に下新田中沖遺跡があります。付近は市街化が進み、住宅街の中に残された水田の一角に所在しております。この地域は古くから水田地帯であったことが付近の発掘調査によって明らかになっております。近隣には「市之坪・一町田・公田」などの地名が残っており、古代から主要な農業生産地であったことを窺わせています。

今回の発掘調査で、1108年の浅間山の噴火により火山灰に埋没していた平安時代の水田が発見されました。調査範囲が限られていたため水田区画の完全な検出に至りませんでしたが、本調査報告書が地域史の解明に少しでも役立てばと願っております。発掘調査に当たりご理解とご協力を頂いた事業者の牛込忠良氏をはじめとする関係の方々に厚く御礼申し上げます。

平成10年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団長　中　西　誠　一

例　　言

1　本報告書は、民間宅地開発に伴う下新田中沖遺跡発掘調査報告書である。

2　遺跡の所在地　群馬県前橋市下新田町285－2番地他

3　調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長　中西誠一）の指導のもとに委託を受け、スナガ環境測設株式会社（代表取締役　須永眞弘）が実施した。

調査担当　井野誠一・古屋秀登（前橋市埋蔵文化財発掘調査団）

神 津 芳 夫（スナガ環境測設株式会社）

調 査 員　岡田あゆ美（　　〃　　）

4　発掘調査期間　平成10年2月5日～平成10年3月19日

整 理 期 間　平成10年3月20日～平成10年3月25日

5　調 査 面 積　815.6㎡

6　出土遺物なし。

7　測量・調査計画…須永眞弘、測量・実測…板垣宏・権田友寿・岡田あゆ美、写真撮影…神津芳夫・荻野博巳、安全管理…神津芳夫、表土掘削・埋戻し作業…都丸保男、作業事務…柴崎信江が担当した。

8　本書は、調査団の指導のもと、スナガ環境測設株式会社が作成に当たり、原稿執筆を神津芳夫、編集・校正…須永眞弘、実測図の整理他…岡田あゆ美、内業事務…須永豊が担当した。

9　発掘調査に参加した方々（五十音順）

青木もと代　　内山恵美子　　後藤初治　　関根時太　　都丸藤子　　山崎勘治

凡　　例

1　本遺跡の略称は9A-82である。

2　遺構名・略称　畦畔…A、溝・水路…W、石…S

3　実測図の縮尺　遺跡平面図　　1/100、1/400　　土層断面図　1/40

4　挿入図は、国土地理院発行の25,000分の1「前橋」を使用した。

5　遺跡の位置の基準　　国土地理院三角点及び水準点を照合済。

国土地理院の2級基準点第511号、第513号から遺跡の北西地点にA-0点を測設した。

基準点　A-0地点　第Ⅸ系座標値　X-39,780.000m　Y-68,760.000m

水準点　BM.92.00m、等高線5㎝、グリッド4m間隔

6　土層断面の土色名は「新版標準土色帖」（農林省農林水産技術会事務局　監修　財団法人　日本色彩研究所色標監修）による。

7　土層注記及び本文中には、As：浅間山の略称を使用した。

8　断面図のB軽石下水田土壌部分…▨を使用。

9　遺構の面積は、平面図による座標面積計算により算出した。

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
Ⅰ　調査に至る経緯……1
Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境……1
　1．遺跡の立地　　2．歴史的環境
Ⅲ　調査の経過……1
　1．調査方針　　2．調査経過
Ⅳ　層序……2
Ⅴ　遺構と遺物……4
　1．水田の形状と水田面　2．畦畔　3．水口
　4．溝　5．水田土壌　6．遺物
Ⅵ　まとめ……6

挿　　図

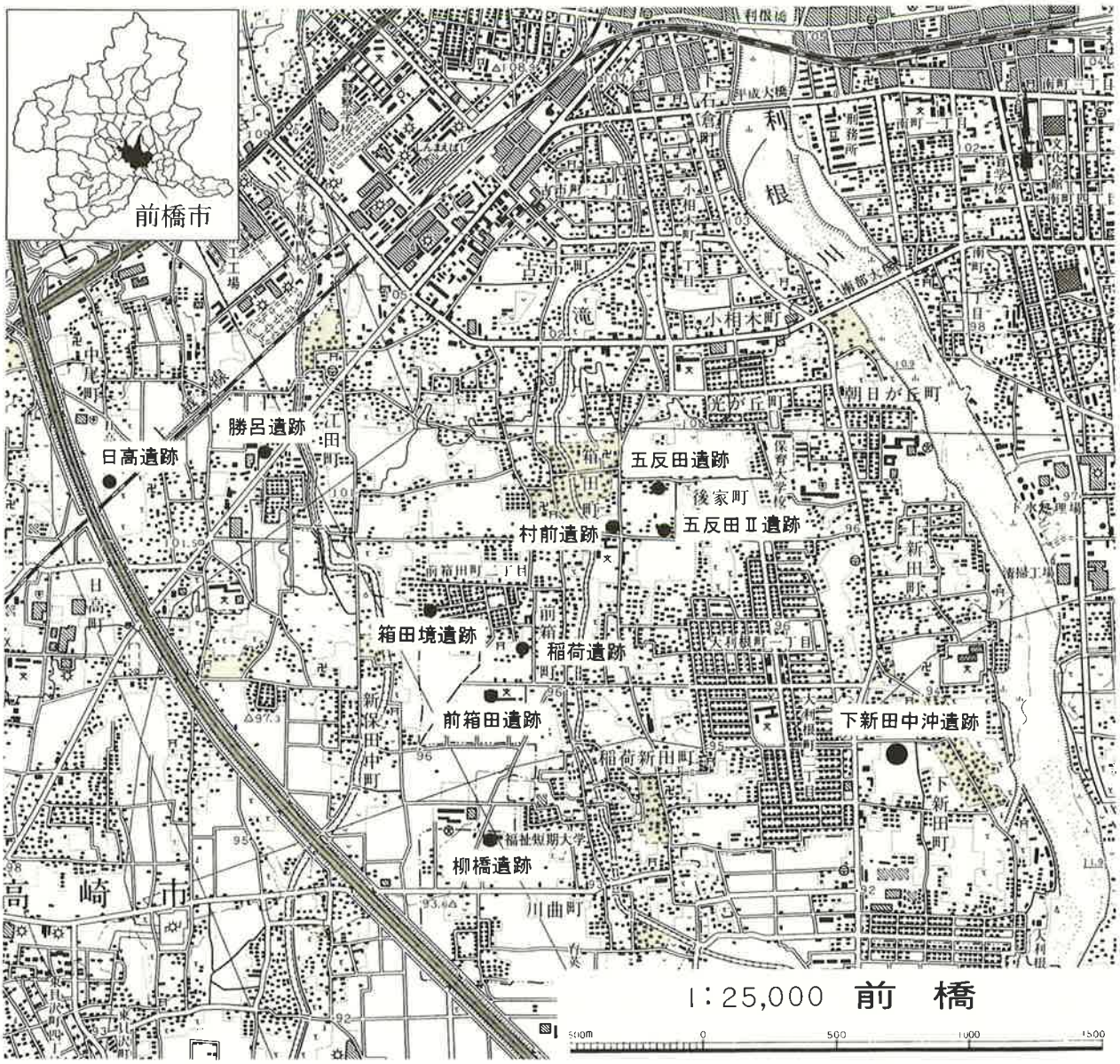
第1図　下新田中沖遺跡周辺遺跡図
第2図　基本土層断面図……2
第3図　下新田中沖遺跡周辺図……3
第4図　6～10・13号水田、畦畔、水口実測図　…5
第5図　セクション・エレベーション実測図……7
第6図　下新田中沖遺跡平面図……9

表

水田跡計測表・畦畔断面計測表……4

写真図版

図版1　遺跡全景、水田4～14号、畦畔13～15
図版2　足跡、牛・馬足跡、並列畦畔、10号畦畔
　　水口1・6、溝（W-1）



第1図　下新田中沖遺跡周辺遺跡図

I　調査に至る経緯

民間の宅地開発計画の申請に伴い、前橋市教育委員会文化財保護課と開発行為者と協議検討を行い、トレンチによる試掘調査を行ったところ、As-B軽石層下に平安時代の水田遺構の存在が明らかになった。このため開発地内の道路用地全面の発掘調査を実施して、記録保存することとなった。

発掘調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団の指導のもとに、事業者である牛込忠良氏と同調査団と民間調査機関であるスナガ環境測設株式会社が委託契約を締結し、実施することとした。

II　遺跡の位置と歴史的環境

1．遺跡の立地

下新田中沖遺跡は、前橋市市役所から南約3.4km、主要地方道前橋・長瀞線と利根川に挟まれた前橋市下新田町字中沖285番の２他に所在する。本遺跡の東方約500mは利根川が南流し、西方約200mには大利根団地の住宅街が連なり、さらにその西側約500mに滝川が南流している。この滝川は建設大臣の管理する一級河川であるが、その水利権は天狗岩用水組合にある。近世初め頃に開発され、現吉岡町の利根川から導水され利根川右岸一帯の前橋市、高崎市、玉村町の一部に潅漑用水として地域の生活を支えてきた河川である。この滝川から小相木町で分流された殿田用水が当遺跡の北側を南流する河川である。南方はわずか200m余りで大利根第二団地、高崎市大沢町、同萩原町に接している。

遺跡地周辺の地形は、標高92.0m前後で、現況水田の広がりや水路の配置等から考察すると、南東方向にわずか傾斜していると窺われる程度でほぼ平坦地である。

2．歴史的環境

本遺跡の立地する前橋台地は、古代から水田が営まれた地域である。滝川と染谷川を隔てた西方３kmの高崎市域にある日高遺跡は、本県における水田研究の端緒となった遺跡である。また付近には本遺跡と同時代の平安時代末期の水田跡が検出された勝呂遺跡、村前遺跡、五反田遺跡、五反田II遺跡、箱田遺跡、前箱田遺跡、柳橋遺跡、稲荷遺跡などが存在する。

本遺跡の北西方向約3.8kmには、奈良・平安時代の上野国の政治的・文化的中心地としての推定国府域が存在する。従って、前記の付近水田遺跡とともに本遺跡も律令経済を支える基盤として、付近一帯は重要な水田地帯であったと考えられる。

III　調査の経過

1．調査方針

市教委の試掘調査結果をもとに発掘調査を実施した。

調査区の設定は、公共座標に基づき、東西方向に延びる調査区を算用数字で、南北方向に延びる調査区をアルファベットで呼称して、４m毎に小グリッドを設定した。グリッドの呼称は北西隅の名称を使用した。また水準は、公共水準点に基づき調査区内に測設した。

図面作成は、１/40、１/100、１/400の縮尺を使用し作図を行った。遺構の写真撮影（白黒・リバーサルフィルム）も行った。

2．調査経過

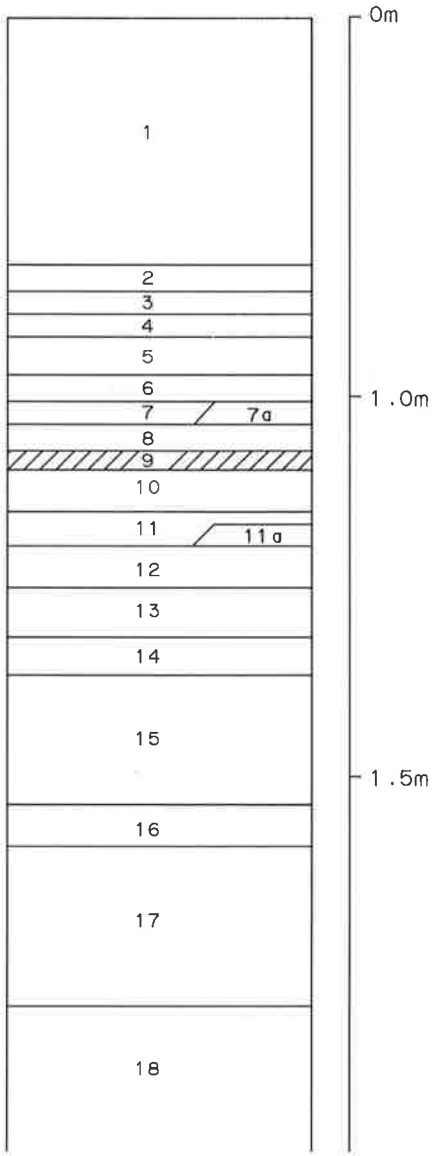
平成10年2月5日　調査事務所設置
9日　バックホウ・ベルトコンベヤー・キャリヤダンプ・トイレ搬入
10日　発掘調査用具搬入、調査区域確認
12日　バックホウによる表土掘削、遺構確認ジョレン精査開始
16日　測量基準点設置、水田面精査開始
17日　グリッド杭・BM杭設置
2月23日　セクション実測及び平面測量開始
27日　水田面精査完了
3月6日　遺構周辺現況測量
10日　測量完了
13日　深掘り土層確認調査
埋め戻し開始
19日　事務所、調査用具、資材等撤収
整理作業

Ⅳ　層　　序

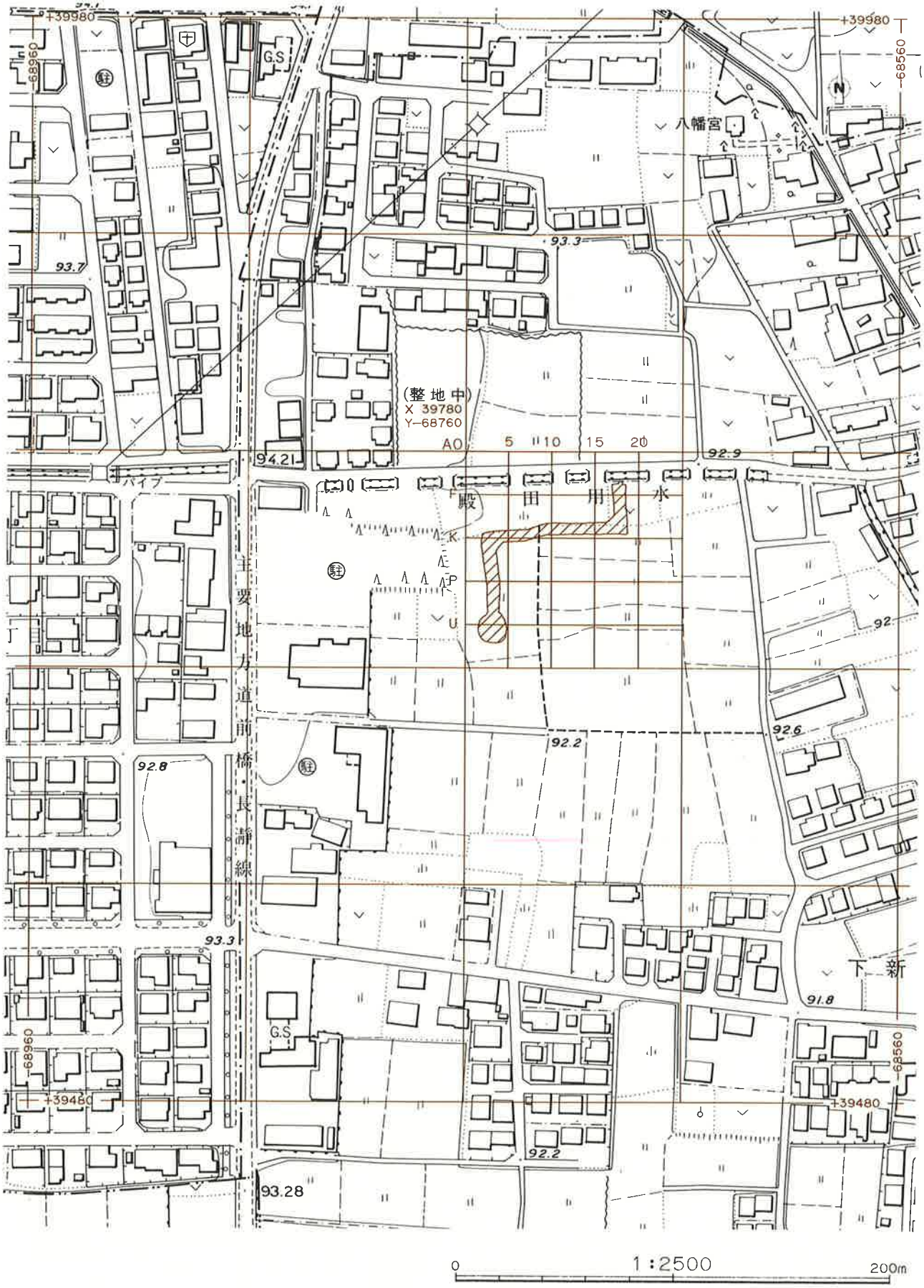
基本土層は右図のとおりである。8層がAs－B軽石層でその直下の9層が平安時代末期の水田跡の土層である。15層はAs－C軽石層に伴う土層で水田耕作土の可能性が考えられるが遺構は検出されなかった。

土層注記

1　盛土
2　現水田耕作土　A軽石僅か含む
3　明黄褐色土層　A軽石3％
4　黄褐色土層　A軽石3％
5　褐色土層　粘性あり　B軽石含む
6　褐色土層　B軽石30％
7　褐色土層　B軽石70％、弱粘、締まりあり
7a　暗褐色土層　B軽石70％、弱粘、締まりあり
8　B軽石純層
9　黒褐色土層（水田土壌）
10　灰褐色土層　軽石含む
11　灰褐色土層　微粒軽石含む
11a　黒色土層　軽石多量に含む
12　灰褐色土層　粘性あり
13　灰褐色粘質土層
14　褐灰色土層　C軽石50％
15　黒褐色土層　植物根酸化あり
16　灰色土層　15・17層の混土層
17　灰白色土層
18　砂礫層



第2図　基本土層断面図



第3図　下新田中沖遺跡周辺図

V　遺構と遺物

平安時代の1108年（天仁元年）の浅間山噴火の際の軽石（As-B）によって埋没した水田跡14面が検出された。

1．水田の形状と水田面

(1)　形　状

調査区域が宅地開発地内の道路用地で面積が狭小のため、四囲が畦畔に囲まれた完全な形のものはなく、いずれも水田の一部で形状の判別は難しい状況であるが、畦畔の交点から想定すると方形と考えられる。

(2)　水田面

水田面には人の足跡、牛馬の足跡と見られる円形や楕円形の窪みが認められた。これらは1・4・5・6・14号水田に多く見られた（図版2－1参照）。また5・8号水田には牛馬が踏み込んだ足跡と見られる群状の窪みが見られた（図版2－2参照）。東側の畦畔3・4と西側の畦畔5に区画された4号水田の水田面は湿地で、I・J-10～14グリッド付近がやや落ち込み谷地状になっている。

水田跡計測表　　（　）は推定値　N・S・E・Wは畦畔位置

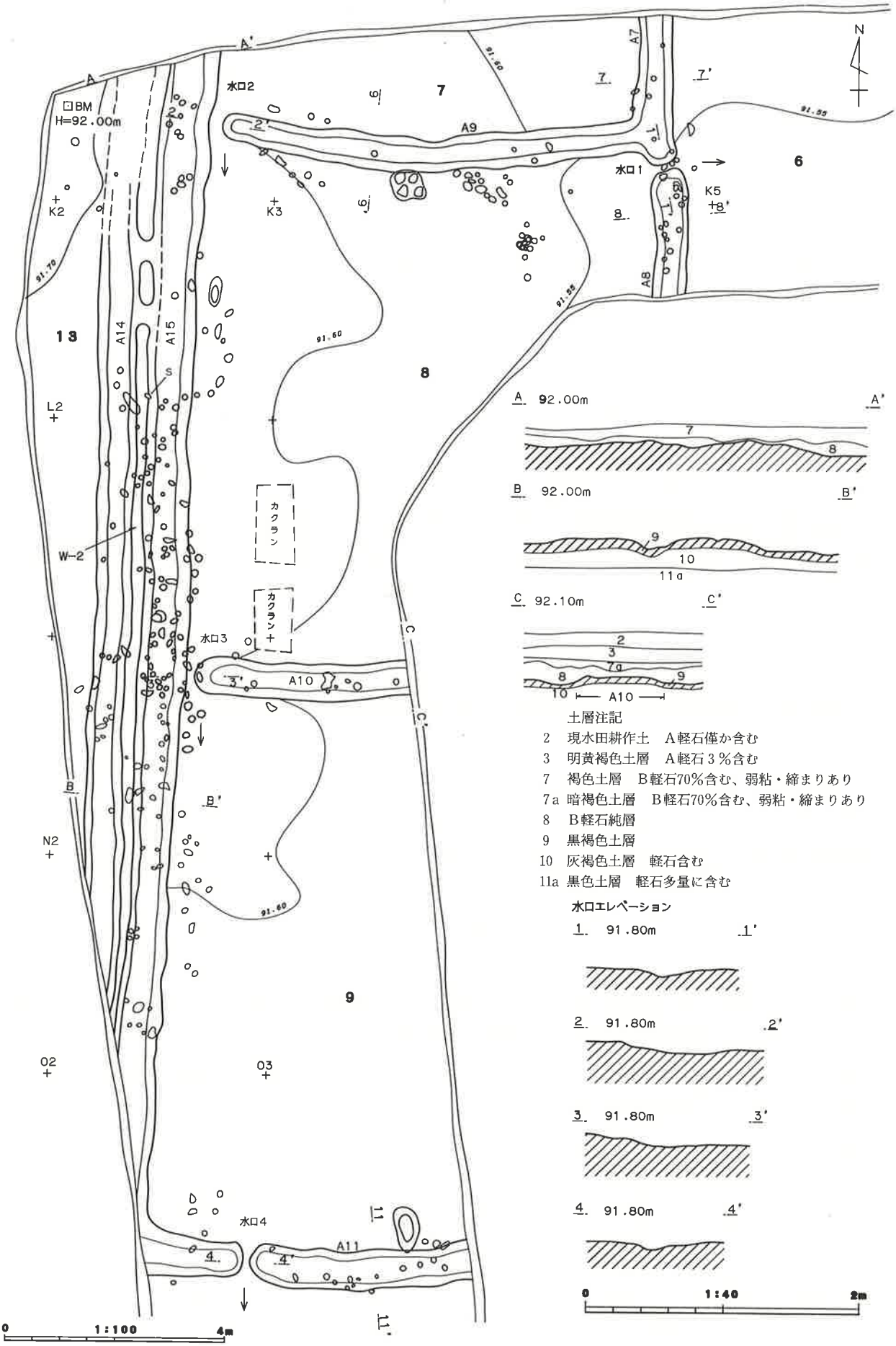
水田No.	面積(m²)	東畦(m)	南畦(m)	西畦(m)	北畦(m)	水口(カ所)	備　　考
1	49.25	—	4.5	—	—	—	足跡多数
2	82.58	—	12.0	3.4	4.5	—	
3	5.71	—	—	1.3	12.0	—	
4	137.17	4.6	—	4.4	—	—	W＝1に切られる　足跡列有
5	27.69	4.4	—	5.0	—	—	
6	25.36	5.0	—	5.2		W＝1	
7	13.62	2.1	8.6	1.1	—	S＝1	西が大畦畔
8	52.39	3.0	4.6	10.3	8.6	N・S＝各1	西が大畦畔
9	50.36	—	6.0	10.6	4.6	N・S＝各1	西が大畦畔
10	44.44	—	5.0	(9.5)	6.0	N・S＝各1	西が大畦畔
11	85.88	—	6.3	16.6	5.0	N＝1	西が大畦畔
12	9.40	—	—	3.0	6.3	—	西が大畦畔
13	12.46	21.6	—	—	—	—	東が大畦畔
14	55.90	23.7	—	—	—	—	東が大畦畔

2．畦　　畔

畦畔の築造は水田土壌の下の土層を削り原型を作りその上に水田耕作土を塗り固めている（図版2－4・5参照）。畦畔の形状はいずれも押し潰された台形を呈している。検出した畦畔の長さは短いが、南北畦畔はほぼ座標北軸方向に走行している。東西の畦畔は南北の畦畔と直交する形で交差しており、極端なずれは見られない。検出した畦畔の交点はいずれもT字状に交差している。

畦畔断面計測表　　（　）は推定値　N・S・E・Wは畦畔位置　単位：cm

	グリッド	上端幅	下端幅	畦の高さ				走行方向		グリッド	上端幅	下端幅	畦の高さ				走行方向
				N	S	E	W						N	S	E	W	
1	G-17	35	78	4	1	—	—	N- 89°-E	9	J-3	34	70	3	5	—	—	N- 90°-E
2	I・J-17	31	80	3	4	—	—	N- 91°-E	10	M-3	31	69	9	5	—	—	N- 90°-E
3	I-15	35	70	—	—	1	3	N-172°-E	11	O・P-3	45	72	4	6	—	—	N- 91°-E
4	J-15	33	79	—	—	2	3	N-180°-E	12	S・R-3	44	67	5	4	—	—	N- 80°-E
5	J-7	33	61	—	—	4	1	N-175°-E	13	V-3	47	76	2	3	—	—	N- 98°-E
6	J-5・6	28	60	—	—	3	3	N-179°-W	14	M-2	40	67	3	4	—	—	N-179°-W
7	J-4	34	63	—	—	2	1	N-179°-E	15	M-2	36	73	7	6	—	—	N-178°-W
8	K-4	32	67	—	—	4	2	N-173°-E	—								



第4図 6～10・13号水田、畦畔、水口実測図

Ｊ２～Ｖ３グリッドにかけて走行する南北の畦畔は、幅員・高さの規模を他の畦畔と比較してみると大畦畔に相当する可能性が考えられる。しかしこれと直交する東西の大畦畔・交点は検出できなかった。またＪ２～Ｎ２グリッドにかけての部分では、大畦畔と考えられる畦畔と並列して走行する畦畔があり、特異な状況である。この２本の畦畔間は上げ堀と考えられ水路として使用したものと思われる(図版１－４参照)。この窪地にはAs-Bが堆積していた。

３．水　　口

水口は調査区内で６カ所検出した。水口１は８から６号水田、水口２は７から８号水田、水口３は８から９号水田、水口４は９から10号水田、水口５・６は10から11号水田に配水するように作られたものと考えられる。

４．溝

Ｉ－９～Ｊ－８・９グリッド方向の溝（W－１）と、Ｊ－２～N－２グリッド方向の溝（W－２）の２条を検出した。

溝１は、As-Ｂ堆積層を洪水による暗褐色砂質層が切っていることからAs-Ｂ堆積後に洪水があり、その時の流路跡とも考えられる。また溝の両側には畦畔らしき高まりが確認できないので、水田耕作用水路の確証がない。幅約1.2m、長さ4.8m、流路の勾配は約４/1000で北から南へ流れていたと思われる。

溝２は畦畔の項でも述べた並列畦畔間にあるもので自分の水田専用の用水路であるものと思われる。幅約25cm、長さ12.5m、勾配は約３/1000で北から南の水田へ配水した水路跡と考えられる。

５．水田土壌

As-Ｂ軽石層下の水田面の土壌は、粘性で締まりのある黒褐色土で厚さは５cm程度あり、水稲栽培に適している。

６．遺　　物

遺物は検出されなかった。

Ⅵ　ま　と　め

１．As-Ｂ軽石に埋没した平安時代末期の水田14面を検出した。水田の規模は、調査範囲が狭小のため部分的な検出となったので、形状は方形と見られるが面積は推量できない。

２．畦畔は押し潰された台形状を呈しているが、遺存の状況は良好である。これは水田面の下層を削って畦畔原形を作っていることに起因すると考えられる。

３．水口６カ所の検出から考えると、これに関係する水田は６面あり、検出水田14面の43％に当たる。このことから各水田への配水は水口を通して給水管理が行われていたと考えられる。

４．水田面上に残された人や牛馬のものと見られる足跡には明瞭なものや方向性を窺い得るものがなく水田作業との関連を判断することは出来ない状態であった。

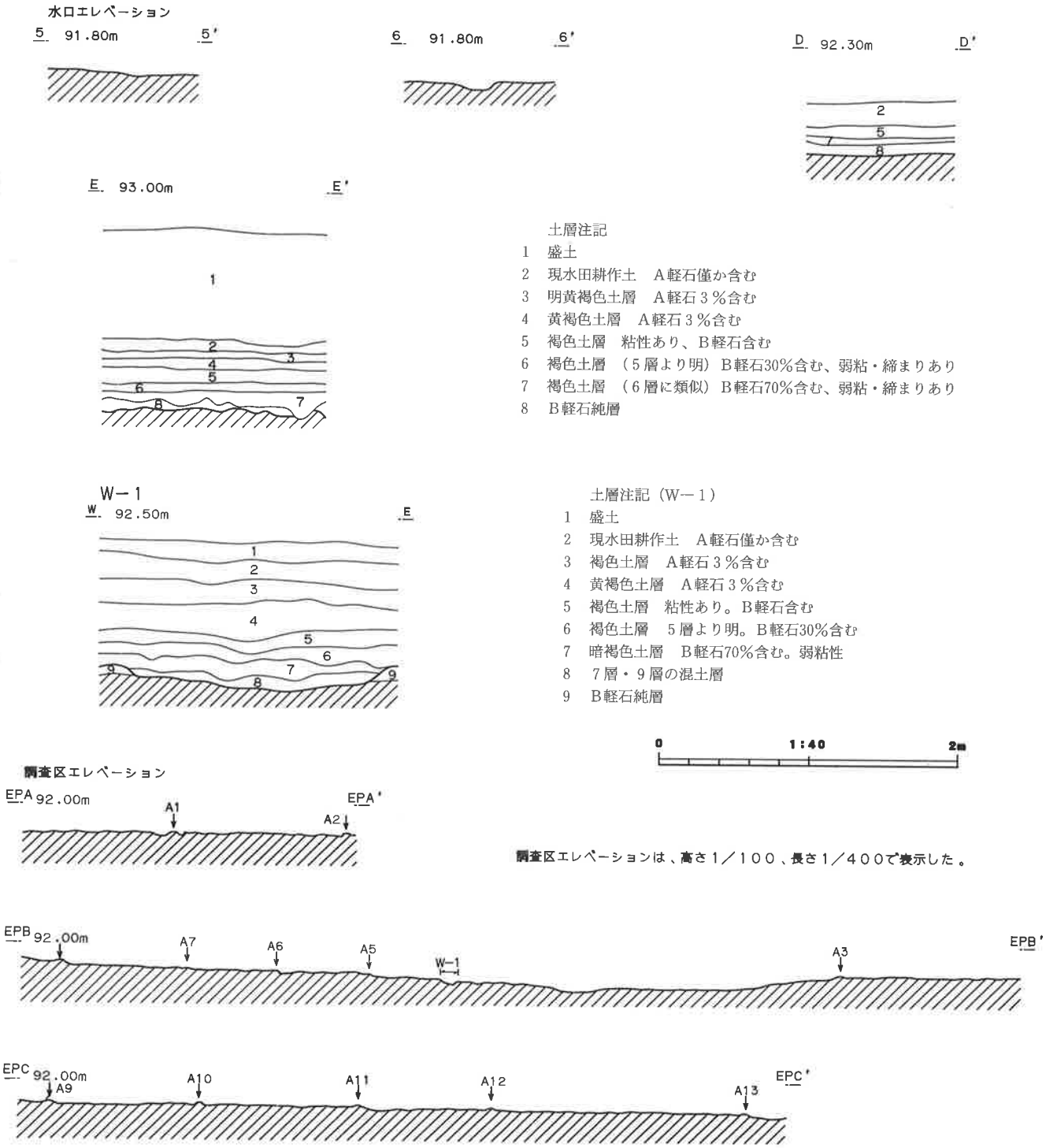
５．As-Ｂ軽石に覆われた水田の状況から推察すると、軽石は水田面上に殆ど一様に堆積したままの状態である。これを除去したり掻き寄せたりした復旧作業の痕跡はなく、耕作を断念したものと考えられる。

６．溝１は、As-Ｂ軽石堆積後の洪水による流路跡と考えられ、洪水時の砂質層がAs-Ｂ層を削っている。

7．本遺跡と条里制との関連……本遺跡で検出した南北に走行する畦畔15号は規模等から大畦畔と考えられるが、これと直交する坪境・坪交点を示す東西の大畦畔は検出出来なかった。検出したそれぞれの畦畔はほぼ東西南北の軸と極端なずれはなく方格に水田が区画されている。本遺跡は推定国府域と至近距離にあり、近隣に「市之坪・一町田」という地名が残っていることなどからも条里制の施行区域であったと想定できる。

参　考　文　献

「五反田遺跡」　1987　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
「五反田II遺跡」　1995　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
「六供下堂木II遺跡」1997　前橋市埋蔵文化財発掘調査団

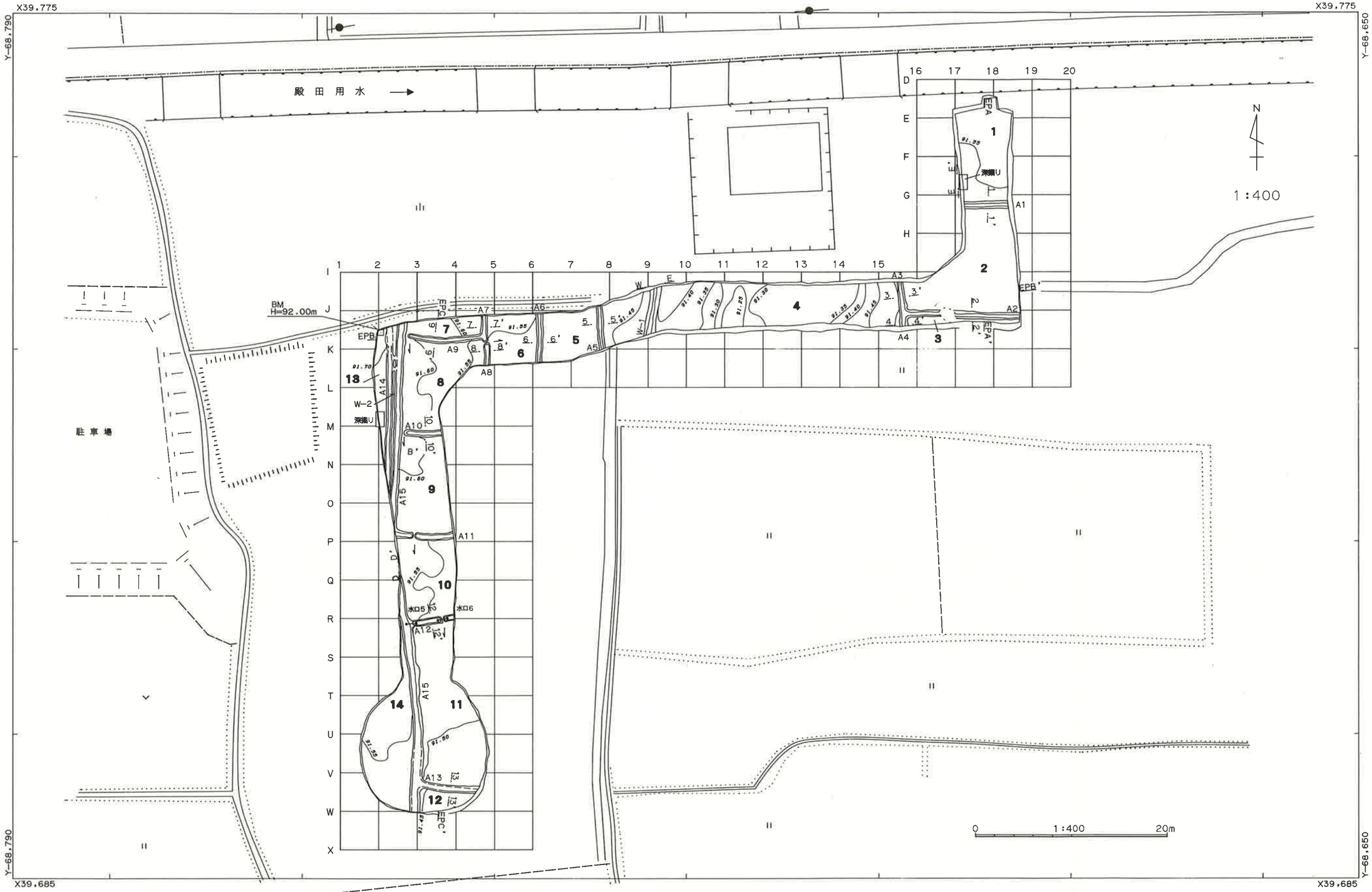


土層注記
1　盛土
2　現水田耕作土　A軽石僅か含む
3　明黄褐色土層　A軽石３％含む
4　黄褐色土層　A軽石３％含む
5　褐色土層　粘性あり、B軽石含む
6　褐色土層　（５層より明）B軽石30％含む、弱粘・締まりあり
7　褐色土層　（６層に類似）B軽石70％含む、弱粘・締まりあり
8　B軽石純層

土層注記（W－１）
1　盛土
2　現水田耕作土　A軽石僅か含む
3　褐色土層　A軽石３％含む
4　黄褐色土層　A軽石３％含む
5　褐色土層　粘性あり。B軽石含む
6　褐色土層　５層より明。B軽石30％含む
7　暗褐色土層　B軽石70％含む。弱粘性
8　７層・９層の混土層
9　B軽石純層

調査区エレベーションは、高さ１／１００、長さ１／４００で表示した。

第５図　セクション・エレベーション実測図



第6図　下新田中沖遺跡平面図

1　遺跡全景

2　遺跡中央・水田４～８号

3　遺跡南側・水田８～14号

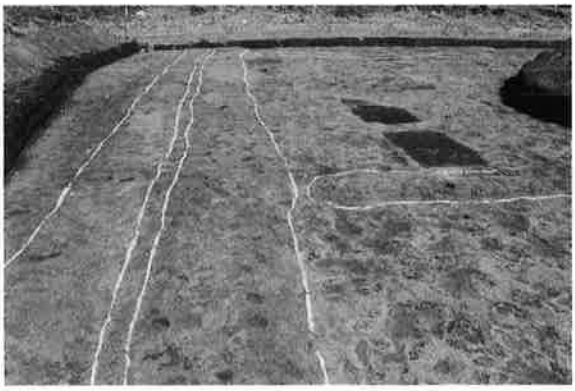
4　畦畔14・15　南から

5　畦畔15・13　南から

図版 2

1　足跡　水田４号(J10グリッド)

2　群状の牛・馬足跡　水田５号



3　並列畦畔14・15

4　並列畦畔の断面

5　10号畦畔断面

6　水口１

7　水口６

8　溝(W－１)断面　北壁

抄　　録

フリガナ	シモシンデンナカオキイセキ
書名	下新田中沖遺跡
副書名	民間宅地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ	
編著者名	神津芳夫（スナガ環境測設株式会社）
編集機間	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371―0007　群馬県前橋市上泉町664番地の4
発行年月日	西暦1998年3月24日

所収遺跡名（フリガナ）	所在地（フリガナ）	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
下新田中沖遺跡（シモシンデンナカオキイセキ）	前橋市下新田町（マエバシシシモシンデンマチ）	10201	9A-82	36°21′21″	139°04′03″	19980205 19980319	815.6㎡	宅地開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下新田中沖遺跡	水田跡	平安時代	水田跡14面	なし	なし

下新田中沖遺跡

平成10年3月20日　印刷
平成10年3月24日　発行

発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町664番地の4

編集　スナガ環境測設株式会社
前橋市青柳町211番地の1